

## 見える命 見えないのち

京都音羽山清水寺貫主 森 清範

おはようございます。ようこそ、早朝からのお詣りありがとうございます。今日、皆さま方がお越しいただくというのを前から伺っておりまして指折り数えて待つておりました。そうしたら、朝からこんないい天気になりました。先代さんもさぞお喜びになられていることと思います。十二年になられるんですね。あつという間でございます。

ただ今お詣りになられました瑩山禪師さまの碑でございますが、あの碑は先代さまと奥さまと一緒に建てたもので、そして開眼除幕式の時には總持寺の板橋禪師さまもお詣りいた

てしております。そんな事が昨日のように思い出されまして、黒田和尚様のあのお元気なお姿を彷彿としておるところでございます。あれから一度、横浜善光寺さまにお詣りをさせていたただいたんです。友人に曹洞宗の和尚がおりまして、一緒にお詣りに行こうということではいかせていただきました。そのような事もありご縁が深うございます。

清水寺のお観音さまは瑩山禪師様と深いご縁がございます。禪師さまのお母さまは懐観さまという方ですが、この方が大變観音さまを信仰



されてお詣りをなさったところ、生き別れとなっていたお母様、瑩山禅師のおばあさまと再会されるという、そういう深い縁がございます。観音様といいますと、わたしどもの観音さまは三十三年に一度の御開帳となります。ですので、三十三年間ずっと扉が閉まっています。あと十七年ほど経たないと三十三年にはならないのです。そのときには全国津々浦々から大勢の方々が観音様にお詣りなさいます。

私どもの清水寺は今から千二百年前に創建をされました。奈良時代の末、平安時代の少し前の頃です。その頃に観音様ができたのですが、平安時代に入りますと、もう『京都に行ったら清水に行こう』と云われていたそうです。「桜が咲いた、清水さんに行こう、紅葉の時も行こう、新緑の時も京都に行こう」と。皆さまもそうでございます。修学旅行で来られた人もおりましょう。清水寺と言いましたら舞台があ

って、そこから見る光景が実に美しい。観音様の浄土かと思うほどでございます。私は毎朝、本堂に五時に入るのでございますが、今朝もいいお天気で、まるで観音様の浄土だなと思ひながら、お詣りをさせていただきました。このように昔から大勢の方がお詣りされております。

さて、清水寺は源氏物語にも出ております。清少納言さんの『枕草子』にも何か所もでております。第六十六代的一条天皇の中宮彰子さまの女官が紫式部、皇后定子さまの女官が清少納言です。この二人の女官が、御所の中で相對していたんですね。紫式部が清少納言の事をこう言ったそうです。

「清少納言こそしたり顔にいみじうはべりける人……よく見れば、まだいと足らぬこと多かり」と。

「清少納言は得意な顔をしてはるけどまだま

だ未熟だ」と。

女性はいつの時代も強いものでございます。

この清少納言さんが清水寺に何度も来てくれていました。

皆さんもようご存知の『枕草子』一段目、

「春は曙（あけぼの）。やうやう白くなりゆく山際（やまぎは）、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」

ここから始まり、

「清水などに参りて、坂もとのぼるほどに、柴たく香の、いみじうあはれなるこそをかしけれ」

これは今、ちようど皆さまが上がってきた門前町です。柴を焚いている煙がなんともいい香がして、風流だと言っているのです。

他にも幾つもあります。清少納言は方々のお寺にお説教を聞きにいつているんです。昔は皆さんよくお寺に行ったものです。相談事も歌

も踊りももちろん御詠歌もお寺にいつて和尚さんにやってもらつていたんですな。今でいつたら文化センターみたいなものですな。

ですので、清少納言さんはあちこちのお寺に行つてお説教を聞いておられます。その中で説教の講師はどんな人が良いかと書いておられるんですな。

「説経の講師は顔よき。講師の顔を、つとまもらへたるこそ、その説くことの尊さも覚ゆれ。ひが目しつれば、ふと忘るるに、にくげなるは罪や得らむと覚ゆ。このことは、とどむべし。少し齡（とし）などのよろしきほどは、かやうの罪得がたのことは、かき出でけめ。今は罪いと恐ろし」

説教の和尚はまず顔が良く、男前がいいって書いてあるんです。今で言ったら、イケメン

がいいって言っているんです。男前だったらじつと見るので内容もその尊さもよく分かるってあります。男前でない和尚の話聞いてみるとよそ見（ひが目）をすると書いてあります。こんなこと書いて仏罪が恐ろしい。私も先は長くないので、男前や男前でないなどと言つて罰が当たつてはかなわないので書かないでおこうと言いながら書いてあるんです。

この方は面白い方でございますね。

ここに座っておりますと、学校の先生が教壇に立っているようなものでね、ちょっと長い話をぐずぐずすると、「もう和尚さん早くやめなはれ。次の予定があるのに」とすぐに顔に出るんですな。もうしばらくでございますから、我慢しておいてください。

今、言いましたようにここは三十三年に一度の御開帳があります。御開帳というのは、閉ま

っている扉を開けます。すると中にいらつしやる観音さまのお姿が見えるということですよ。それは一つのセレモニーなんです。

わたしたちの心の中にも仏さんがおられます。そしてこの心の中に貪瞋痴をはじめとする一〇八の煩惱があるわけです。一〇八の煩惱が扉なんです。この煩惱を取って、扉を開いたら仏さんが見えるわけです。

皆さんは仏さんですよ、言っちゃって、『なんでこんなに欲深いわたしが仏さんなんや?』と思うでしょう。心の中にいっぱい煩惱が巣づくっているんです。それを取ろうということですよけど、これは取れないんです。人間から煩惱を取ったら人間でなくなるんです。人間だから仏さんを拜むことができるんです。今晚帰ったらそつと自分の心を開いてみてください。あんまり良いもん入ってないはずですよ。

あいつ腹立つ、あいつ憎たらし、あいつはど

ないかなったらい、とこんな調子です。あれ欲しい、これ欲しい、あなりたい、こうなりたいと、心の中に渦が巻いております。皆さんいかがですか? 私も、一つぐらいブランド品欲しいと思っておりますか? ブランド品を日本語に訳してみてください。あれは二流品ではなく、一流品ですよ。『一流品』、この漢字をじつと見てください。「いっぺん流れた品」と書いてあります。ここで笑った方はわかっていらつしやる方です。

人間には執着があります。人間だれしもございます。

「皆人の心の奥の隠れ家に 仏も鬼も我も住むなり」という古歌があります。

心の中に仏も住んでいるけれども、鬼も我も

住んでいるということですよ。ですから、人間ほ

ど良いことをするものはおりませんが、人間ほど悪いことをするものもおりません。善も悪も好きも嫌いも全部この心の中に入っているんです。

最近新聞を読んでもいましたら、人間は八分間



に一遍、嘘を言うって書いてあったんです。よくしゃべるひとは、八分どころではないんですよね。そのとき私はドキッとしました。えらいこと書いてあると思いませんか。ですからこの中に嘘も本当もあるんです。どうやって鬼をとってしまおうかと考える前に、私は仏さんとはなんやろうと思ったほうが早いと思うんです。弘法大師さまは、『十住心論』で人間の心を十に区別しています。その最後の第十に「秘密莊嚴心」というのがあるんです。人間の隠れたところの奥の奥に仏さんがおられると言ってます。だからその仏さんをめがけてズバツと入ったほうが私は早いと思うんです。

もう終わってしまいました。京都の立命館大学で宗教講座というのをやっております。学生さんも、一般の方も大勢いらっしゃる前話をしたのですが、その講義の後、学生さんが

「和尚、仏ってなんですか」と質問してこられました。これは難しいんですね。端的に仏って何かと答えるのは難しい。

宗旨によつて仏さんの扱いが違うんです。仏を一言でいうのは難しいんですが、現在ありま  
す仏教、すなわち禅や浄土や法華などの鎌倉仏教、天台や真言などの平安仏教、さらにすべての宗旨に共通したことがあるんです。それは何かといえますと、すべてのものに仏が宿るとい  
うことなんです。

これを「草木国土悉皆成仏」というんです。天台の「本覚思想」という考え方なんです。草も木も国土といった抽象物までも仏さんになるっていうんです。

もともとインドの『涅槃経』の中に「一切衆生悉有仏性」という言葉があり、この一切衆生というの  
は人間を意味しており、全ての人には仏さんが宿っていますと  
いうことです。それが

だんだん発展し、中国から日本に来て、「草木国土悉皆成仏」となつて全てのものに仏が宿るとい  
う事となつたのです。

また、悉有仏性ではなく、「悉皆成仏」、つまり仏に成るとはつきりといっているのです。これを言い換えますと、全てのものに命が宿ると思  
つたらいいのではないか、「仏とは命や」ということです。全てのものに仏が宿るとい  
うのなら、全てものに命が宿ると考えたほうが理解し易いのではないかと答えたのです。

年末の漢字一字は皆さんご存じですね。昨年  
は「安」でしたね。その前は税金の「税」でした  
ね。「命」という年もありました。

ところで書いているのは私なんです。ご存じ  
でございますか？ この前、北海道の紋別に行  
つたんです。幼い子供が、「漢字書いているの  
知っているけど、おっちゃんは知らん」とい

うんですよ。「水臭いやつちやなあ」と思ったんですけど、なんでかなと思つたら、大きなパネルに字をかきますとテレビカメラは私の後ろから撮っているの、後頭部しか映ってないんです。顔は映らないんですね。この前、NHKに行つた時にたまには顔を映したらどうですかといいましたら、「いりません。あんたはずつとむこうを向いていて下さい」と言われてしまいました。

あの年末の「今年の漢字」を書く時の筆はい筆を使っているんです。「牛耳筆」といいまして牛の耳の毛を入れているのです。

牛は放牧しますよね。雨が降りますと、雨がかかります。そうすると耳のなかに水が入りますので、耳の毛が水を吸収して耳に水が入らないようにするのです。だからこの毛は墨もちがいいっていうんです。これは昔から中国でも使われている伝統的なものなんです。これを太い

筆の真ん中に少し使えます。そうしますと、バーツと書いてもいっぺんに墨が出ていけません。

「今年の漢字」はもう二十一年になりますけど、はじめの時は、書く字を教えてくださいました。日本漢字能力検定協会の理事長さんが「和尚さん教えてあげます。和尚さんも急に言われても大変でしょう」「そうですね」「そうしたら、今年は〇〇という字です。云うたらあかんですよ」ということで「云うたらあかん」「云うたらあかん」と何遍もそう言われますと何かこう人に言うてみたくなりますよね。おしゃべりの女性はダメですね。聞いた途端に、「言うたらあかのやけどな」と言いながら電話するんですわ。その日のうちに町内みな知っておることになります。

「今年の漢字」は午後二時に書くのですが、その日の昼頃に理事長さんが見えないよう封筒



に入れて、これですといって持ってきてくれるんです。開けて初めて分かるんです。ですから今年はこの字かなと思つて毎年、手のひらに字を書くんですが、当たりませぬ。でも二十一年の間でいっぺんだけ当たつた字があるんですよ。関東の方は分からないかもしれませんが、「虎」でございます。これは十八年ぶりに阪神タイガースが蘇つたとき、絶対「虎」だとおもつたんですよ。関西の人はトラで沸き上がつておりましたから、間違いないと思ひました。

さて、字を書くときは筆を大きく跳ねたりすると墨が飛んできます。顔が真っ黒になります。それで「虎」の虎冠は跳ねると知つていたんですが、跳ねないで止めたんです。そうしたら、はがきに赤い字で、「あなたはご存知ですか？ 虎という字の虎冠は跳ねるのですよ」と訂正してきました。親切な人が多いですな。

昨年は「安」という字を書きました。書いて

から三十分くらいお経をしたり、御祈祷をしたりして後に寺務所に帰ってきます。すると二分後に電話がかかってくる、「なんであんな字書いたんだ」とか、「筆順が違ふ」とか、「あんなところは跳ねへんのや」とか色々と言ってきます。親切な人が多いのです。私はあの舞台上で漢字の書き取りテストをしているわけではないんです。ですので、少々のことは目をつぶつていただけるとありがたいんですが……。

先程も言いましたように「命」が選ばれた年がございました。

命という字は、白川静先生によりますと、命の令の部分人が屈んで神さまの声を聞いている形を表し、口の部分は、神さまに祈る感謝の言葉が入っている箱だと言っているんです。ですから人が神さまにお辞儀をしてありますが……でございますと、言っているのが命の原形だという

ことでございます。命って不思議ですね。なんで生きているのでしょうか？

自分の心臓は決して私が動かしているわけではないのです。

不思議なことに生きていますね。この間、「人間の血管」という本を読んでいたんです。

動脈、静脈、毛細血管から成り立っていますね。心臓から出た血液は動脈を通って全身へ送られ、そして静脈を通って、老廃物を持って帰ってきます。心臓を出た血液が一周して帰って来るのに一分かかるそうです。そうして動脈から静脈、それに毛細血管みんなを繋ぎあわせると、十万キロになるっていうんですよ。十万キロって想像がつかないでしょう。地球の一周が四万キロですから二周半になるんです。地球二周半を一分間で一周するんです。これはすごいですよ。人間の命、なにも人間だけではありません。

ませんが、命というのは誠に不思議なものでね。

皆さん今朝目覚めたときどうでしたか？

最初に何を思いましたか？ 今日には天気がいなと思っただけではないでしょうか？ しかし、明日の朝、目が覚めるかどうかは、誰も保証できません。ずっと目が覚めないかもしれないです。

私はよく学生さんと話をするんです。学生さんに仏さんというとなんかアレルギーがあります。それで私は仏さんのことを命というんです。その命には見える命と見えないのちがあるんです。

目に見える命は生物的生命のことです。現に生きている身体です。この生きている命は見えないエネルギーによって支えられているのです。支えている宇宙の条件の一つでもかけたら、私

はここに立つておられません。宇宙総がかりで、私を生かせしめているんです。宇宙総がかりで道端に咲いているタンポポを咲かせているんです。その条件の一つでも欠けたら、存在しないんです。ですから見えない、いのち<sup>ぢ</sup>によって支えられているんです。誠に不思議なものです。

皆さん方は、恐らく今朝「京都市行ってくるね」といったら、「行つといでやす。お留守番してるさかいに、どうぞゆつくり行つておいでやす」といつてくれる方があから来れるのです。行つたらあかんという人がいたら出てこれないんですよ。見えなくてもその力が支えてくれているのです。その見えない力のお蔭で、その感謝によって見える命が成り立っているのです。

私は毎朝、本堂に五時に入るのを日課にしております。それからずっと諸堂を廻って寺務所に来て、朝一番に昨日の残務整理をして、そし

て自坊に帰るんです。

ある夏の暑い時でした。雨が降っていましたが、諸堂参りから帰ってくる際にはカーッと晴れていまして、山道を帰っておりましたら、前に若い青年がふらふら歩いているんです。後ろから見ても、ズボン上げたるかいなと思うくらい下げています。なんであんな格好をしているんですかね。「おはようさん！」追い越す時に言うたんですよ。

そうしたら、黙っているんです。機嫌が悪いんでしょうな。もういっぺん大きな声で「おはようさん！」といったら、

邪魔くさそうに「おはよ」

「こんな朝早くからお詣りですか」って私がいったら、

「お詣りとちゃうんや。夕べな、京都で一晩中遊んでたんや。これから大阪に帰るんやけど、遠足で行ったことがあるし、いっぺんな」



「お詣りやないか」

「お詣りとちがう」

私だって、この人がお詣りにきたか、そうではないかぐらい分かります。

話のついでに言うただけです。それで私が「ど  
うや、この朝の空気。おいしいやろ」と言った  
ら、「おっちゃんこれくさいで、草のにおいや。  
くさいくさい」って言うんです。

「なにいうてるんや。これが朝一番の取れた  
ての空気や。すまんけど、京都の町の中ではこ  
の空気は味わえへんで、朝早くこの山に來んと  
味わえへんのや。この取れたての空気、あんた  
の後ろのリュックサックに入れて持って帰って  
かまへんで。風呂敷包みいっぱい持って帰って  
もかまへんで」とこう言うんです。そうした  
ら「なんでやねん」と言うんです。

「この空気、タダやからな。いくら持って帰  
ってもいっこうに影響あれへん、かまへん」っ

て言ったら、

「空気はタダにきまつてる」と言い返してきます。

「そうか、タダに決まってる空気やけれど、この空気によって地上に生きている全てのものが生かされているんや。それがタダなんや。ありがたいことと違うか。空気だけと違うで、魚もきゅうりも大根もタダ、みんなタダや」って言うたら、

「おっちゃん、それはおかしいで。なんで、魚がタダや、キュウリがタダや、大根がタダや。おっちゃんスーパーへ行ったことないんか」って言うんですよ。

私だってスーパーに行ったことがありますよ。「あるよ」って言うたら、

「魚一匹千円って書いてあるやろ。タダと違うやん」と反論してきたんです。

そう言い合いながら、このとき私はこの若者

と同じ立ち位置で話ができると思いました。

「まあ聞け、落ち着きなはれ。漁師さんが立派な魚を釣ったとしよう。そしたら漁師さんがその魚さんにありがとうと言って百円でもあげているか？ そんな漁師さんどこにおる。こんな立派な大根できたといつて大根さんに十円でもあげているお百姓さんどこにおるか？ それやったら大根もタダや。キュウリもタダや。みんなタダと違うか。そりゃコストはかかる。コストはかかるけど、そのもの自体は大宇宙、大自然の恵みと違うか？ この宇宙や自然、あるいは人々や、見えないものによって支えられているのと違うか？」とこう話しました。

「あんたなんで字を読めんねん」って聞いたら、「わしら学校行ったからだ」って言うんですよ。

「学校行って誰が字を教えてくれはったんや。先生やろ。その学校は誰が出してくれたんや。

お父ちゃんとお母ちゃんやろ。そうしたら少なくとも先生、お父ちゃん、お母ちゃん、あるいは友達や先輩、後輩こういう関係のなかで成り立っているのと違うか？」とその若者に言ったのです。

「諸人よ思い知れかし 己が身の 誕生の日  
は母苦難の日」

という古歌があります。私たちが生まれた日にはお母さんが生き死にわけて産んでくれたのです。誕生日にケーキ買ってきてロウソクを立てます。火をつけて、つけたら「早よう消し」って言われて消します。消すぐらいだったら初めからつけなければいいのと思えます。そして「おめでとう」と言ってケーキを食べます。これではあかんのです。「お父ちゃんお母ちゃん、おおきにありがとうございます」というのがあって、はじめて「おめでとう」なのです。

昔から、「めでたくかしく」といわれます。めでたいけれど、畏まる、この畏まる事が、めでたさをぐつと引き立てているのです。

ぜんざい 善哉も最後に塩を入れます。その塩の塩辛さが善哉の本来の味をぐつと引き立てるんです。

見えないのちに見える命は感謝をすることが大事です。これは、民族が違おうが、主張が違おうが、主義が違おうが、何処へ持っていくても共通することです。見える命は見えないのちに支えられ、その見えないのちに「おおきに」といつて感謝を述べられるということが大事ではないでしょうか。

今日は、早朝からお詣りいただき、ありがとうございました。縁をつくっていただきました。また京都にお越しの際はお立ち寄りくださいますよう、誠にありがとうございました。

(平成二十八年五月十七日 清水寺参拝時ご法話)